

歴史コースプランの

セクショナルリズム傾向について

近藤 英雄

はしがき

アメリカは、第一次世界大戦から第二次世界大戦にわたって、教育の反省と改革とがなされた。すなわち小学校・中学校においてはプログレッシブ・エデュケーション「Progressive Education」が、ハルパー、プラグマチズム「Pragmatism」とジョン・デューイ（John Dewey）の哲学思索によつておこなわれ、大学程度では第一次世界大戦の前後は、ハーバード大学を中心として、大きな大学では、リベラル・エデュケーション「Liberal Education」の方向をとつた。その後ハーバード大学では、あらゆる科目から学生の好むものを与えることから学生の専門とするものと、それ以外のものを補足する考えを出して、ハーバード大学では、一九二二年から一九二六年の間に一般教育「General Education」が設定され

たのである。^{註1}これによると、アメリカの教育改革には、小学校・中学校のプラグマチズムとデューイの哲学思索によつて行われた改革方向と、大学のリベラル・エデュケーションの方向から、一般教育の設定にいたつた改革方向との二すじの方向があるように思われるのである。戦後に行われた日本の教育の反省と改革とは、おのずからアメリカのこの二すじの方向のものが区別なく移入されたように思われる。従つて内容的にみると、例えば大学一般教育の歴史コースプランについても、是非論は別として、源流的にみると、ある部分にはデューイの「地理及び歴史の意義」^{註2}が斟酌されているように思われるし、またある部分ではリベラル・エデュケーションから一般教育への改革内容として、その理念ないしは目的の十分な理解と学生本位に徹する教育精神を根拠条件とするコース編成などが紹介されている。かかる教育改革思潮から、

歴史コースプランは研究編成されているように思われる。また実施に際しては、日本自身としても未だ教育改革の過渡的現象とも見なされる新旧不調和からもたらされる一種の混乱が存在しているように思われる。例えば、歴史科目の西洋史、東洋史・日本史の分科目の問題と、一般教育の三系列の人文・社会・自然の総合コースとは、不可分関係のものであつて、新移民の総合コースの長所を探つて、理論的に展開しても、西洋史・東洋史・日本史の分科目の問題と歴史時代区分とが研究され協定されなければ、一般教育の歴史および学生の歴史的知識が区々となり、また思潮的方面からも、大学としての方向が不明瞭のように思われるのである。従つて歴史コースプランについて、アメリカの思潮系統およびその理論のすじをたて、アメリカの地域性の基盤をも考え、日本における現在の実状を再検討して、新制大学に即したプランの在り方が研究されてほしいのである。かかる意味でこゝには、日本の歴史コースプランのセクショナルリズムの傾向を指摘し、コロムビア大学の「コンテンポラリー」の示唆をあげて、コースプランの一方について考察し、大方の叱正を仰ぐ次第である。

註一 Warner, Dr. Robert A. (Louisville University, Kentucky) 講義

なおハーバード大学の報告書として次のものが出版されている。

“General Education in a Free Society”
Report of Harvard Committee, Cambridge, Mass., University Press, 1945.

註二 “Democracy and Education” by John Dewey, Macmillan Co, Copyright, 1916.

1 歴史コースプラン

新制大学の教育は、一般教育“General Education”と専門教育“Special Education”にわかれてゐる。これを旧制大学と比べてみると、一般教育の行われるところに新しい意味がある。また一般教育は専門教育の準備教育“Preparatory Course”ではなく、それ自体としての完結性をもつた教育であるといわれている。さらに一般教育の目標についてみれば「アメリカに於ては、ストレスの置きどころに多少のずれがあつて、必ずしも一義的に決定されているとは限らない。例えば或る論者は善良な市民“Good Citizen”であるといふ、ある者は、よき人間“Good man”または全人“Whole man”であると称し、他の論者は、人間としての全体 Human Wholeness”であると断じ、また他の者はコモン・マン“Common man”だと具合である。しかし権

威ある報告書や論著においては、一般教育の目標の何たるかは、表現のニュアンスこそ異なれ、大観すれば一致してゐると断言してはばからない。要するに、大学における一般教育の目標は「自由な民主社会の推進力となる市民の養成にある」といつて差支えない。」本来大学教育というものは、人間として未熟な学生の智能を啓発して、人間としての完成、いはば人間そのものの教育を主眼とすべきものであつて、その基礎の上に立つて専門の学術・職業的技能を修めるといふのが正当な教育の在り方と思われる。ひるがえつてかかる一般教育の目標実現のために、一般教育の教授法に関連して、研究されている歴史に関係あるコースプランについて、検討してみると次のようである。

大学一般教育の歴史コースプランについては、「大学における一般教育」および「IFEL研究集録」に掲載されている。これらは実施案あるいは理想案があり、しかもいろいろなコースタイプのもものが集録されている。従つて日本における大学一般教育の歴史コースプランの在り方について、その一端をうかがい得るものであらう。これらのコースプランは、科目・コース・方法・授業時間・学習時間・単位・授業目的・目次・教授方法等から立案されているが、こゝでは紙数の関係でその全部を掲げることはできないが、コースプランの「授業目的」

と「コースプラン方法」についてのみ挙げてみると次のようである。

- (1) 近代的現代的関心を中心とする必要から歴史を省る。(西洋史)
- (2) 日本歴史の発展を具体的に把握させるため、本期においてはまず古代国家形成の諸問題を大陸との政治的文化的交渉を背景としながらとりあげる。(国史学)(問題法)
- (3) 主として科学技術の発展を通じて、それと人間の社会生活の発展との関係を検討することを主眼とし、範囲は人類の歴史の始めから現代に及ぶものを対象としている。(文化史)(問題法と歴史的方法)
- (4) 社会情勢の変遷時代の特徴を中心に政治経済文化の推移を説く。(西洋史)(問題法)
- (5) 東洋史の構造をとき、世界史における東洋の位置を略説する、その際東洋の風土と民族、東洋の文化宗教等についても概略説明する。(東洋史序説)
- (6) 世界史の構造をのべ、現代世界史の成立に対する西洋の歴史的位置を概観的に把握させる。(世界史)
- (7) 明治維新を基底として展開する現代日本の政治的経済的社会的諸事象を学生に理解させることを目的とし、方針としては常に社会の現実の動向を注視せしめつゝ、歴史の發

展段階を体得させることに努力し、特に公式主義的理論にまどわされることのないように学生を指導することを第一義とする。(明治維新史(問題法))

(8) 歴史的な物の見方は単に past time の史実を引用することではなく、過去の史実とその発展過程即ち time と process を同時に包含するもの、見方をすることであることを学生に理解させる。

(9) 現代社会に生活し、学びつゝある学生のために各立場の異つた歴史観を紹介して自主的な批判力を得させる。

(10) 古代や中世は専門分野でも理解し難い点があるで現代人の人間感覚に最もちかひ近代(十五世紀以降)を General Education の対象とする。

(11) 人間性とか市民的とかナショナルリズム、デモクラシーの歴史事実とその発展の process をみることににより、学生一般教養をたかめたい。(歴史および歴史観)(問題法)

(12) 近代市民社会の成立過程を政治経済社会文化的観点から発展的に理解する。(西洋史・市民社会の成立)(歴史的方法)

(13) 世界史の成立構造を具体的に把握し、われわれがこの現代といふアポリアの中で何をどのようにやつて行くかを考える準備たらしめる特に社会経済の立場から歴史の発展の必然性を具体的に把握させたい。(現代世界史)

(14) 日本現代史を主とするが、常に全体との関連を顧慮し、殊に世界の歴史の動きとの関連に留意する。

(15) 比較研究を重んじ、特徴の把握につとめる。

(16) 学生の研究活動を主とし、教師は助言者後からの立場に立つ。

(17) 計画は大綱にとどめ、学生の研究活動の実状によつて具体化する。(日本史)

(18) 近代日本の諸特性を世界史的な見地から理解させるため、近代の諸問題を中心とし、必要な限りにおいて古代にさかのぼる(日本史)

以上のコースプランの「授業目的」を中心として「科目」をA項とし、「歴史時代区分」をB項とし、「授業内容の観点を」C項として三項目から分類してみると、次のようである。

A項

- a 西洋史
- b 東洋史
- c 日本史
- d 文化史
- e 世界史
- f 明治維新史(市民社会の成立、日本農村社会の近代化等の特別史的のプランを含む)
- g 歴史(歴史および歴史観のプランを含む)

B項

- a 先史・原史・古代から現代に及ぶもの
- b 古代・近代・現代のいづれか一時代のみを対象として扱うもの
- c 近代から現代に亘るもの
- d 現代但し倒叙的に扱うもの
- * これらの時代区分を大別して、現代・近代・中世・古代として、これらの組合せをみると「十五組」^{註4}となる。

C項

- a 現代的関心
- b 科学技術史
- c 政治・社会・経済
- d 政治・経済
- e 政治的・文化的
- f 社会・経済
- g 社会
- h 地理歴史的
- i 民族的
- j 世界史的見致
- * この内容的観点はコースプランのそのまゝのものであるが、例えば政治・社会・経済の組合せだけでも、計算してみると、

(1) 古い体制が解体されても直ちに新しい秩序が成立し難い、新しい秩序を成立せしめ得ない欠陥を云々するよりも、遺制として動かし難い、旧体制の根柢なり実体を明らかにすることが有効ではないかと思う。私はこゝにこそ社会科学部門における歴史の取扱ひの立場があるのだと理解する。こゝでは農村社会の近代化、特に東北地方における場合を主題にして、社会経済歴史を動員し、一つの糸を立てて見ようとする。ところがこゝでは農村社会の近代化はあくまで日本社会における近代を理解するために具体的な地主制度の問題をとりあげたのであり、General Education の立場を離れないことに注意している。従つて解決より指摘にとどまり、将来の問題が残されている。(日本史農村社会近代化)(歴史的方法と問題法)

(2) われわれを包む自然とわれわれを育む社会の歴史的現実的実態を把握し、自然と社会から受けた精神および生活上の影響を考察する。

(3) われわれの向上のためには、われわれの社会が如何に改善さるべきかという問題解決のための能力を養う。(歴史)

(4) 日本歴史の発展に関する知識を得させるとともに、歴史の見方考え方を訓練し、将来これの展望実践に資する。

$$3C_1 + 3C_2 + 3C_3 = \frac{3 \times 3 \times 2 + 3 \times 2 \times 1}{1! + 2! + 3!} = 3 + 3 + 1 = 7$$

(註)となるが、ここでは、対象なり、主眼点がプラン全体からみて、区別し難いので、大別して、「十組」としておく次第である。

以上、A項即ち科目における七組の方向と、B項すなわち歴史時代区分の十五組の方向と、C項すなわち授業内容観点の十組の方向とを、組合せてみると「A項×B項×C項=7×15×10=1050」すなわち千五十組のコースプランが出来るのである。さて、コースプランの方法論については「大学に於ける「一般教育」に、概観法「Survey Course」ブロック・アソシエーション「Block and Gap」総合法「Integrated Course」問題法「Problem Approach」事例法「Case method」歴史的方法「Historical Approach」古典法「Great Book method」等が挙げられているが、前記の十四コースプランのうちで、七コースプランは問題法あるいは歴史的方法を用い、他は特にコースプランの方法として明記されておられないが、概観コースのもの、総合コースを希望せるもの、およびその他である。このコースプランの方法論については、「実際のコース編成に当つては、これらの中の一方法で一コースを編成する場合よりは、これらを適当に組合わせて使用する場が多し、又その方が効果的である」と述べられている。

立たしめるのが目的であつて、決して倫理学なる学問そのものを研究するものではない。故に倫理学とは何かというような問題に「こだわる如きことがあつてはならない。」

と述べられているが、この考え方から、一般教育の歴史も歴史現象の理解を与えてその人間形成に役立たせる目的であると言ひ得よう。かかる目的を実現するための各大学一般教育の歴史、その実施案たる歴史コースプランは、前記のごとき歴史科目・時代区分・内容的観点となつてゐる。そこで例えば西洋史の近代から現代にわたるコースプラン、東洋史の近代だけのプランあるいは日本史の現代だけのプラン……と組合わされていくのである。従つて一般教育の歴史は各大学区々まちまちであり、それから修得する日本の学生の歴史的知識は各大学により相異し、ある大学では西洋史ある大学では日本史、また時代にしても西洋史の近代から現代の範囲、或は日本史の現代だけの範囲しか非専門の学生は修得しないといつたような、知識のこま切れる現象を呈して来るのである。かかる点について、歴史現象を理解させて人間形成に役立たせる目的が主であれば、方法論たる歴史コースプランは、多岐多様であつてもよいという考えは別として、日本の地域性の基盤を考慮してみると狭小なる面積であるだけに、猫額を小きざみにしているよに思われ、そこに私はある種のセク

で、コースプランの方法は多数の組合せの方が効果的とされている。試みにこの組合せを計算してみると「一二七組」となるのである。そこで、前記の科目・歴史時代区分・内容的観点の組合せに、このコースプラン方法をD項として、これらが各自の考えで加味されるとすると「A項×B項×C項×D項=7×15×10×127=133350」すなわち十三万余の組合せとなるのである。かくのごとく歴史コースプランは、きわめて多岐多岐のものとなるのである。かかることは、一般教育における歴史の在り方は区々まちまちであり、一般教育の歴史コースを選択せる日本の学生の歴史的知識は、各大学により、それぞれ相異していることを物語るものである。かかる現象については、殊にアメリカ合衆国の地域性の基盤である、面積をみると、日本の約二十余倍であるが、これと比較して、面積の狭小なる日本において、かくのごとき歴史コースプランの内容が分割多岐の傾向である点について、どうかと思つている次第である。「大学基準協会資料」十号五頁には、

「一般教育に於ける各科目は人文科学の場合でも、哲学・倫理学・歴史学等の学問そのものを研究するのではない。それらの学の領域に属する問題を扱うために、自然に之等の学の名で呼ばれるのである、また大学教育であるから、学問的態度や方法で各科目を扱うが、例えば一般教育の倫理はあくまで一般学生——倫理学の専攻者でない——に道徳現象の理解を与えてその人間形成に役

シヨナリズム的傾向を感じざるを得ないのである。

アメリカにおける一般教育、特に歴史コースプランについては、寡聞であるが、コロムビア大学の「コンテンポラリー」は、歴史の区々、知恵のこま切れるを呈さないような「目次」が選択されており、また眼目も「学生の現代社会の活動に知的参加する」ことを判然とうたい、一般教育の実を挙げているように思われるし、また「アメリカ民主主義の為の高等教育」のよりよき世界のための教育「Education for a Better and Better」には「今日大学は何を実現しようとしているかを明確にする必要がある。——過去におけると同様に将来も——大学教育は多様の統一「Diversity in Unity」の原則を実現すべきである。各大学がそれぞれの方法で貢献すべきであるが、然し共通の目的に合致する様に努めねばならぬ」との意見を述べている。すなわちアメリカの大学教育は「多様の統一」を原則としており、反セクシヨナリズムの方向をたどつて、一般教育の実が挙げられているように思われるのである。

註1 大学に於ける一般教育

——一般教育研究委員会第二次中間報告——

(大学基準協会資料九号)
昭和二十五年八月九頁

註2 大学基準協会資料九号、十号

註3 第六回 I F E L 研究集録 (一般教育 昭和二十五年版)

$$\begin{aligned} \text{註4} \quad & 4C_1 + 4C_2 + 4C_3 + 4C_4 = \frac{4}{1} + \frac{4 \times 3}{2} + \frac{4 \times 3 \times 2}{3 \cdot 1} + \\ & \frac{4 \times 3 \times 2 \times 1}{3 \cdot 1} = 4 + 6 + 4 + 1 = 15(\text{組}) \end{aligned}$$

註5 大学基準協会資料十号

註6 " (ヤ1頁)

$$\begin{aligned} \text{註7} \quad & 7C_1 + 7C_2 + 7C_3 + 7C_4 + 7C_5 + 7C_6 + 7C_7 = \\ & (1+1)7 - 7C_0 = 27 - 1 = 128 - 1 = 127(\text{組}) \end{aligned}$$

註8 米國 七、八七五、〇六八平方呎
日本 三六九、八四二平方呎

註9 "Higher Education for America: Democracy: the Report of the President's Commission on Higher Education" Harper, New York, 1947.
第六回 I F E L 研究集録二〇六頁

II コンテンポラリー

アメリカのロンドンポリア大学の「コンテンポラリー・シビルゼーション」からは「一般教育の歴史の在り方について」の論文を示唆をうけるものがあるが、特に歴史コースと「Chapters in Western Civilization」が編纂されたロンドンポリア大学の「高等教育の実施計画」の紹介についてのみ。

1. The Medieval Heritage: Society and Economy.
2. Philosophical and Political Problems.
3. Secular Political Thought and Centralized Government.
4. Early Modern Capitalism and Expansion of Europe.
5. Renaissance Moral Attitudes.
6. The Reformation and National Churches.
7. The Development of Modern Science.
8. Economic Growth and the Mercantilist State.
9. Absolutism and Constitutionalism.
10. The Enlightenment: Tenets and Ideals.

11. The Enlightenment: Political and Economic Principles.
12. The French Revolution. (Vol. I)

1. The Romantic Protestant and its Forms.
2. Early Nineteenth Century Counterrevolution and Reaction.
3. The Industrialization of Society.
4. The Dominion and Trials of Economic Liberalism.
5. The Struggles of Political Liberalism.
6. Social Criticism and Programs of Reform.
7. The Direction of Nineteenth Century Science.
8. Applications and Interpretations of Science.
9. Capitalism after 1850
10. The Problems of Democratic Practice.
11. National Powers and Imperialist Rivalries.
12. Social and Moral Perspectives since 1850.
13. Early twentieth Century Currents of Thought.
14. Twentieth Century Social Crisis. (Vol. II)

これは人文・社会・自然の総合コースであるので、日本におけるコースプランの場合におけるような西洋史・東洋史・日本史の分科目の問題がおのずから解決され、また歴史時代区分では「目次」にみられるごとく中世の社会と経済から筆をもち、現代すなわち二十世紀の社会的危機に及んでいる。

「一般教育における開拓者であるヨーロッパ大学は、第一次世界大戦直後に現在の一般教育の構想の基盤をたてはじめた。他の大学が一般教育計画の認識のための仕事に集中している間に、ヨーロッパ大学は、四半世紀にわたる経験によつて既に試みられた教科課程の改善強化という方向に手がつけられ「現代文明」というコースが計畫された。これはヨーロッパ大学独自の基盤から、ながい間の教科課程の経験から改善されたものである。このコースの眼目は学生をして自己の属する現代社会の活動に知的参加するために自己を形成している歴史の伝統について知らしめんとするにある。従つて内容は現代文明の根源をなすところの事柄から選択され、人文・社会・自然の各部門にまたがる総合コースである。と述べられている。その目次内容は次のごとくである。

Contents:

1. The Medieval Heritage: Society and Economy.
2. Philosophical and Political Problems.
3. Secular Political Thought and Centralized Government.
4. Early Modern Capitalism and Expansion of Europe.
5. Renaissance Moral Attitudes.
6. The Reformation and National Churches.
7. The Development of Modern Science.
8. Economic Growth and the Mercantilist State.
9. Absolutism and Constitutionalism.
10. The Enlightenment: Tenets and Ideals.

また中世から現代まで二十六章にわたる内容の史実の選択の割合をみると、近代から現代の史実が豊富にめられてある。かくのごとく「目次」が定められていることは、歴史事実、歴史の知識がそのすから統一性を具えていることである。その「歴史時代区分」において近代史、現代史が尊重され、この二時代の史実が豊富になっていることは、古代より現代に及ぶ範囲を概観的に扱うことに比較して、授業時間が一定してある場合には、歴史的知識を深く掘りさげ、現代の人間の感覚にちかひ歴史的現象をより広く理解することになると思われるのである。かかる歴史的教養は現代社会の活動に知的参加しうるもので、非専門の学生にとつても、日常生活に活きた知恵 (Wisdom) となるであらう。さらに「目次」の各章については「コンテンポラリー」の序文に紹介されているように、優秀な教授たちがそれぞれ各章を分担して解説をしていくことが注目される。例えば「中世の社会と経済」については Marshall Clough 氏、「初期資本主義」については Shepard B. Clough, Charles W. Cole の両氏が解説をしていくのである。かくのごとく「目次」に従つて、専門家がそれぞれの分野から解説をしている。従つて例えば中世の社会と経済を解説する場合に各教授は自由なる抱負と専門分野において、目的・方針・方法をたてて解説するであらうが、その範囲

は「中世の社会と経済」という一線で統一されているのである。そこで各教授によつてあるは軽重深淺があり、あるはコースプラン方法の相違などがあつても、学生の修得する知識内容は「中世の社会と経済」という範囲にそつて、同一性を具えてゐるといふべきである。

註一「Introduction to Contemporary Civilization in the West」(Columbia University Press, 1947) 第四版

註二「A College Program in Action」

—a review of working principles at Columbia College—
by the Committee on Plan Columbia University press,
New York, 1946.

おすび

(a) 一般教育の目標は「自由な民主社会の推進力となるべき善良なる市民の養成にある」のであるが、この目標にそつてよく立案あるいは実施されつゝある日本の歴史コースプランは、セクショナリズム(Sectionalism)的傾向であつて、アメリカの大学の多樣的統一(Diversity in Unity)とは逆コースの方向と思われる。

(b) 「コンテンポラリー」は学生をして、自己の属する現代社会の活動に知的参加がするために、自己を形成している歴史的伝統について知らしめんとするにある眼目がさだめら

れ、現代文明の根源をなす内容として、二十六項目が選択されて、或る統一的基準がさだめられている。

日本における歴史コースプランは「コンテンポラリー」の「眼目」「目次」に相当するものがなく、それぞれ西洋史の立場から、東洋史は東洋史の立場から、日本史は日本史の立場から直に各々が一科目の分野から一般教育の目標にそつて、歴史コースプランの、コース・方法・授業目的・目次・教授方法および授業時間・学習時間・単位を考慮して、プラン編成がなされてゐるようと思われる。

以上「歴史コースプラン」の検討と「コンテンポラリー」の考察の結果、歴史コースプランの諸欠陥を補ひ、歴史コースプランを通して、一般教育の目標に対する統一的効果の実をあげる方向として、(イ)将来総合コース編成の方向が望ましいこと。しかしながら一般教育の三系列人文・社会・自然の総合コースは、現状からみて、相当困難を伴つてゐるようと思われるので、その先行の問題として、歴史分野の総合コースが研究されてほしい。(ロ)西洋史・東洋史・日本史……等のごとく各々独立専門分野に立つ歴史科目の総合コース編成の一方法として、「コンテンポラリー」における「眼目」「目次」は、参考に資すべき一方法と思われる次第である。

(本稿の要旨は関東地区一般教育研究会人文科学部会において発表されたものである)——一九五二、九、三——